



美術館入口



住宅主屋正面

くまや 熊谷家家相図

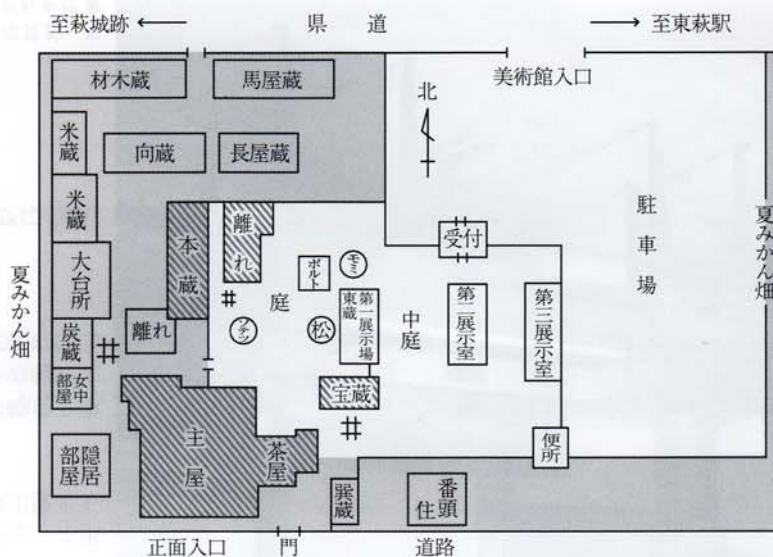
- 部開放
- 部指定重要文化財
- 部非開放

施設

敷地	6200m ²
建物 展示場	242m ²
保管庫	179m ²
事務集会室他	80m ²
重文主屋	300m ²

交通

山陰本線	東萩駅下車 徒歩20分
山陽新幹線	新山口駅より防長又はJRバス 約1時間20分 東萩駅下車



沿革

萩藩7代藩主毛利重就は藩の財政立て直しに着手するや、宝暦4年(1754)3月城下の商人の中から小仕有為の者として熊谷五右衛門芳充(1719~1791)を抜擢して所帯方御用達とした。芳充はよくその期待にこたえて活躍し、大阪御用達であった鴻池や加島屋と同格(上方町人格)に置かれるようになり更に市中大年寄にも任ぜられた。そして明和5年(1768)50才の時今魚店町に新居を構えた。

その後2代五右衛門芳慶(1749~1803)・3代源左衛門芳雄(〇〇~1817)・4代五右衛門義比(1795~1860)・5代五右衛門義敏(1828~1860)・6代五一義右(1818~1882)までは御用商人として藩につかえ、明治以降も7代万吉(1856~1923)・8代二作(1882~1940)・9代敦義(1890~1971)が引続いて230年間この家に住み当10代五右衛門幸

三に至っている。

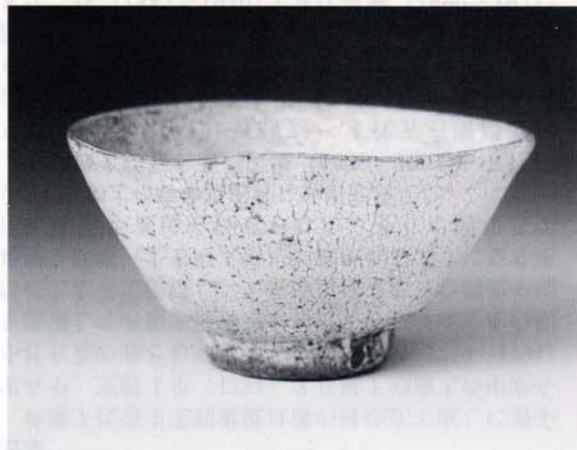
歴代主人のうち特に4代は文化愛好者として学者や文人墨客に経済的援助をしたり、ドイツの医家シーボルトとも親交をむすび、6代は幕末維新に際して尊攘運動を大いに支援して贈位の恩命に浴している。

こうして熊谷家には歴代主人の好によって集められた美術品の外に、多くの興味ある文書類も残って居るので、9代は昭和40年4月これら文化資料を保存及び公開することを目的として、財団法人熊谷美術館を設立開館し、今日にいたる。

重要文化財熊谷家住宅

(指定4棟、主屋、離れ座敷、本蔵、宝蔵)

萩藩の御用を勤めた豪商熊谷家初代五右衛門芳充が明和5年(1768)に建てた家は、広大な屋敷地に



古萩茶碗 銘「翁」

主屋をはじめ数多くの蔵や付属屋が建ち並んでいる。主屋は切妻造り棧瓦葺きで南面し、東側面に茶室、式台等が突出する。平面は桁行を三等分して西側を通り土間とし、床上部は梁間を四等分して八室が整然と並ぶ。土間廻りはていねいに仕上げた太い梁を縦横に架け渡し、豪壮な構成を見せる。大規模で質が良く、意匠も洗練されており、江戸時代中期における地方豪商の富を示す好個の遺例であるとし、昭和49年5月国より重要文化財として指定された。庭園も市内屈指のものである。

建築後、建物の部分的な修理改造等があったが、主屋は、昭和52年11月3日不慮の火災事故により一部焼損したのを機に昭和53年より2年半の歳月と1億4千万円の工費を掛けて国家補助事業として解体修理がなされ、又、離れ座敷、本蔵、宝蔵も、痛み

が激しくなったので、同じく国家補助事業として平成6年2月より、3年半の歳月と4億円の工費をもって大修理が行われた。

目的

萩城下御用商人熊谷家から継承した江戸時代を中心とする美術工芸品並びに町家具類、その他の文化財の保存及び公開をなし、もって我国文化の向上発展に寄与することを目的とする。

事業

目的を達成するために次の事業を行う。

- ① 美術工芸品、民具等文化財の保存並びに公開。
- ② 前項諸資料の調査研究。
- ③ 前各項のほか目的達成に必要な事業。

収蔵品

①書画屏風類

雪舟と雪舟流雲谷派、狩野派、土佐派、南画、浮世絵、和歌俳句、家元等茶掛、名士志士、萩関係等それぞれを代表



シーボルトのピアノ



住宅主屋庭より

する人々の作品。約300点

②茶道具

萩、楽、唐津茶碗、仁清、乾山、木米の作品、その他全国及び唐物陶磁器をはじめとして、香合、花器、風爐、釜、水指、茶入、棗、茶杓、菓子器、煙草盆等一切、約500点

③装飾用品

古銅香炉、料紙文庫、硯箱、軸盆、提重等の美術工芸品約200点

④雑品

古銭、民具、食器、衣類、オランダ渡り陶磁器その他約500点

⑤文書資料

熊谷家文書等 約1,500点 総点数 約3,000点

休館日 月曜日(祝日の時は翌日) 年末年始
 開館時間 AM 9 : 00 ~ PM 5 : 00
 入館料
 大人700円・小人 400円・団体2割引